『図説　付属屋と小屋の建築誌 もうひとつの民家の系譜』

大場　修　編著

農業・農村領域　主任研究官　平形　和世

『図説　付属屋と小屋の建築誌
もうひとつの民家の系譜』
編著／大場　修
出版年／2024年
発行所／鹿島出版会

伝統的な民家といえば、まず人が住む主屋をイメージするでしょうか。民家研究においても、これまでその多くが主屋を扱ってきました。しかし、本書は、主屋ではなく、付属屋や小屋に焦点を当てます。付属屋や小屋を観察すると、もうひとつの民家の世界が見えてくるといいます。民家史学、建築意匠学・構法・材料、土木学という分野横断的な19名の研究者チームが、全国各地の付属屋や小屋の実例を収集し、これまで民家研究で扱われることがなかった未知なる世界を解き明かしていきます。付属屋とは？小屋とは？付属屋とは、主屋に付属して主屋の機能を補完する建物（納屋や蔵など）で、小屋とは山小屋、水車小屋、舟小屋、芝居小屋など、付属屋でもなく、居住に関係しない建物を指して呼ぶことが多いようですが、両者の区別は実際には難しく、本書でも一括りにしています。多く語られることが少なかった、このように簡易で、質素な付属屋や小屋を研究対象にするとなると、独自の視点が必要になります。本書は、伝統的な住空間の中で、付属屋や小屋がどのようにつくられ、発展したのか、そして、どのような役割を果たしたのか等をひも解き、その価値や魅力に迫ります。

本書では、まず、「生業（なりわい）」という視点から、職住一体の住空間における付属屋や小屋が果たす役割を探ります。さまざまな生業がその特性に応じて地域性豊かな付属屋や小屋を作り出しますが、生業の変化によって増築や建て替えが繰り返されます。そして、生業が動態なら小屋も動態であると説きます。次に、「気候風土」を取り上げます。気候風土と地勢が育む民家と付属屋や小屋、屋敷構えから、住空間の地域性と多様性、そこに潜む秩序性を探ります。さらに、「命を守る」という点を取り上げます。水害時には主屋を離れ、水屋や水揚げ小屋に逃げ込みます。水屋の多くは屋敷の裏手に置かれ、その背後には屋敷林が植えられ、洪水時に漂流物を遮る役割が課されました。気候風土をどのように受容し、災害と向き合ってきたか、重要な役割を担ってきた付属屋や小屋の歴史をみることができます。また、付属屋や小屋の材料や工法、技術にも目を向けて、独自の機能や意匠・工法・構造的特徴をも探っています。主屋では、大工による洗練された木造軸組の格式が見られるのに対して、小屋と付属屋は、簡素で自ら容易につくれるものとして、石を積むあるいは石と木で手仕事が行われます。さまざまな「石を積む」「土と石でつくる」技術と営みが示されています。そして、「土蔵」について、構法の歴史や技術、地域性についても迫ります。

ここまで本書を概観してきましたが、生業が生み出す小屋について、少し掘り下げて紹介します。本書では、生業を担う小屋が、生業、いわゆる産業区分、そして貯蔵・作業・乾燥・宿泊／休憩・道具／動力収納・監視／販売などの主機能区分によってマトリクス化され、約90種の小屋を俯瞰することができます。また、個性豊かな小屋が写真とともに解説されています。そして、個々の事例として、柿小屋、養蚕小屋、舟小屋、丸太倉庫、茶工場、鯨組の納屋が紹介されています。例えば、島根県東出雲の畑集落は、昭和30年頃に乾柿生産組合が結成され干し柿生産に特化した柿小屋が建設されるようになり、現在では常設の柿小屋が28棟ある集落です。大量生産によって専門の作業場が設けられ、採光と通風が制御しやすいよう、また効率的な運搬作業のため改良が加えられています。京都府和束町は、茶工場の多くは現在物置となっていますが、茶工場は群として今も残されていて、伝統的な二階建て茶工場や製茶の機械化に伴って登場する平屋建ての茶工場など、地域の実情を反映した製茶史が集落景観に表れています。

本書は、付属屋や小屋の観察から自然や風土、生業や社会との関わりを感じ取ることができる一冊です。加えて、カラー図版で実例が紹介されており、図鑑としても楽しむことができます。本書と触れることで、これまで見過ごされてきた付属屋や小屋にも目を向け、その存在が主屋と寄り添いながら成り立っていることを実感していただけたらと思います。